

職人の技

シリーズ③① 〈紙切り〉

「何かお題はございますか?」「ワールドカップ!」「はい、車の名前に似た選手が活躍しておりますねえ」

客と軽妙なやりとりをしながら独特のリズムで上体を動かしながらはさみを軽快に操り、紙を切っていく。30秒もすれば白い紙には鮮やかにゴールを捕らえるサッカー選手が登場。老若男女関係なく客たちからの歓声と笑顔。そのとき、師匠の口元が少しだけ緩んだ。

「紙切り」は、曲芸やマジックと同様、寄席色物と呼ばれるものの一つ。「一枚の紙をお客の注文通りに切り抜く出し物である。ただ単に自分が思い描くものを作品化するのではない。そこには必ず客とのやりとりがある。おとぎ話、季節

行事、縁起物といった昔ながらのものから、似顔絵、ニュース、最近の流行など、客が楽しみにしている題材はさまざま。

「1日2、3時間はニュースを見ます。専門的なもの以外でもいろいろ知っておかなければいけませんのでね」

卓越した技術は絶対的に必要だが、それだけでは紙切り芸としては成立しない。技術、絵心、そしてコミュニケーションの力。

「パリ公演ではお客様とフランス語で直接やりとりしました。相撲とか盆栽とかそういうリクエストでしたけれどね。通訳を介するよりも直

接の方が、お客様も気持ちいいじゃないですか」

1970年代から師匠は、国内だけではなく海外でも積極的に活動を行ってきた。欧州、米国、中南米、東南アジア:。

「紙切りに国境はない!と思っていますから(微笑)」

確かに、技術だけでいえばそうかもしれない。だが、国境はないのではなく、国境というものをなくしてきた努力があった。紙切り一本で勝負すると決めて故初代林家正楽師匠の門を叩いた時からそれは始まっていた。

「東京オリンピックのころで

林家今丸 さん

した。初代も、これからは外国のお客さんが増えるね、と。そんなきっかけで英語学校に入って10年勉強しました。あのころ芸人というと麻雀、麻雀の毎日。でもわたしは苦手だったから時間もあつてちょうどよかったんですよ(笑)」

自分の人生に対する先見の明とでもいうのだろうか。歌舞伎、坂東流の舞踊、声を鍛えるために義太夫にも通った。それらはすべて紙切りの技術を生かすための愉快な努力。

「パリ滞在が決まった時は、日仏学院に通って、滞在中も午前は語学、お昼にサンジェルマンでバゲットサンドつまんで、午後は絵画の勉強。語学やその国の文化を知ることが、紙切りの技術を生かす上でも必要です」

伝統的な芸だからこそ、新しい時代の空気や、日本だけに限らない発想が必要だと師匠は言う。

「伝統を残す。これはすなわち、現代に生かす、ということ。師匠の教えを守りながら、教わったこと以外のこと、をいかに身に付けていくのか。そこが大切だと思います」

師匠は目の前で、より表現力を高めるためのはさみの最新技術を見せてくれた。動物の毛皮のようなタッチ、やわらかい女性らしいライン取り、秒速7、8カットという

国境も、時代も、
軽やかに飛び越えて。



文=岩瀬 大二
text: Dajji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto

目にも止まらぬ速さで細く細く切りこまれる紙……。師匠が今の時代の表現に合わせて磨いてきた技術だが、ここにも受け継がれた守るべきものは息づいている。この自信があるからこそさらに新しいものを取り込める。

「パリでは紙そのものも面白かったですね。アフリカの紙。来春には招聘があつてサウジアラビアとカタールに行きます。イスラムの世界でどんな新しい紙切りができますかねえ」

躍動するサッカー選手を描いた「ワールドカップ」。それでお題を出した客は記念に持つて帰ることができ。うれしそうに高座に近づく客に師匠が一言。「はい、元祖テイクアウト芸でございます」。客席からドツと笑いが起こる。国境を越えて、時代を超えて。伝統芸は生き続ける。



PROFILE

はやしや・いまる
東京・新宿生まれ。初代林家正楽門下を経て、1964年五代目古今亭今輔の門下となり、以後紙切り芸筋50年。国内では番席の高座を中心に、個展なども開催。海外でも1968年〜70年にかけてのインド、韓国、欧州、北アフリカなどの活動を皮切りに、1970年代には英国、フランス、80年代にはブラジル、アルゼンチン、ハワイ、中国、シンガポールにて公演。以降も毎年のように海外各地での公演を重ねるなど豊富な公演歴、活動経験を持つ。